

〔書評〕

## 徳善義和 『マルティン・ルター:ことばに生きた改革者』

(岩波書店, 2012年, 187頁 + vi)

軽 部 恵 子

2017年はルターの宗教改革が始まってから500年にあたる。ヨーロッパでは既に500年祭の準備に入っているが、日本人にとってルターはあまりなじみがないかもしれない。もちろん、1517年秋、贖宥状を批判する「九十五か条の提題」を教会の扉に貼りだし、宗教改革を始めた人物と世界史の教科書に書いてあるのだが。

日本人がキリスト教と聞くと、カトリックのイメージが強いかもしれないが、それは無理もない。1549年、鹿児島にイエズス会のフランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier, 1506-1552) が到着し、日本で初めての布教活動を開始した。同じくイエズス会のルイス・フロイス (Luis Frois, 1532-1597) は1563年に来日し、140通あまりの日本通信を本国に書き送って、当時の日本の政治・経済・文化に関する貴重な記録を残してくれた。聖母マリア信仰は素人目にも観音信仰と共通するものがあり、ルネサンス期に制作されたミケランジェロやラファエロの聖母子像は、時代と文化を越えて訴えかけてくる。

しかし、ルターを初めとする宗教改革の歴史は、近代、そして現代にいたる国家システムを創造する上で不可欠であった。とくに、ルターの改革を批判したカルヴァンは予定説を唱え、資本主義を受入れる精神的素地を形成した。カルヴァン派の1つであるピューリタン (清教徒) は、イングランド国王ジェームズ1世の迫害を逃れて新大陸に渡り、アメリカ大陸の東海岸に入

植して、新国家の建設に関わっていく。フランスでは、アンリ 4 世が発した 1598 年のナントの勅令によって 1 度はプロテスタントに礼拝の自由が与えられたが、1685 年にルイ 14 世が廃止した。カルヴァン派の 1 つであるユグノーは迫害を受け国外に去ったが、それがやがてフランスの国家財政を圧迫する遠因となった。くわえて、ヴェルサイユ宮殿や離宮の建築費用、対外戦争、アメリカ独立革命への支援が膨らみ、フランスの国家財政は破綻寸前になっていく。

キリスト教史に限らず、近代史、西洋史、国際法、国際政治、国際関係論を学ぶ者にとって、ルターの宗教改革が及ぼした政治的、経済的、文化的影響の考察は避けて通れない。評者は、国際法と国際機構論を大学で担当しているが、どちらの講義でも学期冒頭の数回は近代西洋史の説明に費やし、第 1 回はルターの宗教改革を必ず取り上げる。ルターの偉業と功績を理解できなければ、ヨーロッパ最大かつ最後の宗教戦争である三十年戦争（1618-1648）、宗教と世俗の分離、アメリカ独立革命、フランス革命、ネーション・ステートの形成など、近代西洋史の説明を進められないからである。

前置きが長くなったが、著者の紹介に入ろう。著者の徳善義和は 1954 年に東京大学工学部を卒業した後、日本ルーテル神学校に進み、3 年後に卒業した。専攻は歴史神学、とくに宗教改革である。著書と訳書には当然のことながらルターに関するものが多い。他の研究者によるルター評論もあるが、本書は他の著作と比べて非常に読みやすく、そして読めば読むほど深く考えさせられる内容になっている。それは、後に述べるように、著者がルターの営みを極限まで突き詰めて考察し、至極平易な文体で書き記したからであろう。

本書の構成は序章と終章を含めて、全 7 章である。各章の具体的なタイトルは、序章「ことばに生きる」、第 1 章「ことばとの出会い」、第 2 章「ことばが動き始める」、第 3 章「ことばが前進する」、第 4 章「ことばが広がる」、第 5 章「ことばを受け止める」、終章「ことばに生きた改革者」である。徹底的に「ことば」にこだわった理由は、ルターが「聖書のことばと深く取り組み、その教えの中心をとらえようと、生涯かけて格闘しつづけ」(p.2)、「聖

書のことばを、民衆のために、民衆のわかる言葉で説きつづけた」(同上) ことにある。また、キリスト教が「ことばの宗教」、すなわち「～語」というランゲージとしてのことば、そして語られ、聴かれ、書かれ、読まれるワードやテキストの両面を持つからである (p.3)。

そもそも、旧約聖書はパレスチナで生まれたユダヤ教の聖典で、ヘブライ語で書かれていたが、他民族に伝えられるため、ギリシャ語に訳された(同上)。新約聖書は、古典ギリシャ語を平易にしたコイネー(共通)ギリシャ語で書かれた(同上)。そして、両者がローマ帝国の公用語ラテン語に訳されていく。聖書、教会の公文書ともにラテン語で書かれ、神学の研究もラテン語でなされるようになった(p.4)。しかし、そのため「キリスト教会は『言語』によって自らを民衆に切り離れたともいえる」(p.4)。心の救いや支えが求める民衆が教会の公式言語であるラテン語を理解できなかった事実が、宗教改革につながっていく(pp.4-5)。

かの有名な「九十五か条の提題」の正式名称は、「贖宥の効力を明らかにするための討論提題」である(p.61)。B4サイズの紙1枚ぐらいの文章が、たった2週間で全ヨーロッパをかけめぐり、キリスト教の歴史を変えた(同上)。ルターをイギリスの俳優ジョゼフ・ファインズ(Joseph Fiennes, 1970-)が演じた映画「ルター(Luther)」(2003年、ドイツ。日本未公開)には、提題が活版印刷術を使ってたちまち複製され、馬に乗った人々が分厚い紙の束を各地に配送する場面が出てくる。スクリーン上にあふれる緊張感、史実と照らし合わせても、決して誇張ではないのであろう。

本書によると、ルターの提題は1517年10月31日にヴィッテンベルク城教会の扉に掲示されたと言われているが、実際に確認できるのは、マインツの大司教に宛てた同日付手紙に提題の紙が添えてあった事実のみという(pp.61-62)。評者はヴィッテンベルクの町を訪れたことがあるが、教会の扉(火事で焼失したので、ルターの時代と同じものではない)の前に立った感激を今もはっきりと覚えている。だが、あの扉に提題は張り出されていなかったと知り、軽い衝撃を覚えた。もっとも、教会の中にはルターと彼の同僚かつ友

人であったメランヒトン (Philipp Melanchton, 1497-1560) の墓があるので、ヴィッテンベルクの町を訪れる人には城教会の見学を勧めたい。

ルターが批判した贖宥状 (いわゆる免罪符) は、カネで天国行きの切符を買うことという印象を与える。しかし、贖宥の制度の成立には「ゲルマン世界に広く見られた損害と賠償、代理という考え方が強く影響している」のだという (p.63)。つまり、「他者に損害を与えた場合、その損害に対する等価の賠償を必要と」する慣行が具体化したものだった (同上)。また、贖宥状の販売は、バチカンの聖ピエトロ大聖堂の修繕費用のための寄進ではなく、マクデブルク、ハルバーシュタット、マインツの3司教区の大司教職を兼任するために候補者がローマ教皇に送った献金であった (p.65)。つまり、人々はバチカンへの寄進と信じて、聖職者の財布に寄付していたのである。世の中のからくりは、いつの時代もどこの国でも弱者を虐げる。本書はキリスト教史の入門書であるが、政治学の副読本としても使えそうではないか。

ルターは聖書をドイツ語訳しただけでなく、バチカン側に立つ神学者たちと著作物を通じて論争を繰り広げた。中世の書物は、文字通り書き写すことによって作られたが、ドイツの木材が堅く、日本のように木版印刷が発展しなかったという理由もあったという (p.128)。だからこそ、鉛を使って活字を作る活版印刷術が考案された。15世紀半ばに誕生したこの画期的な方法は、ルターの言説を大量に複製し、ヨーロッパ中に広めた。活版印刷術なくして、宗教改革はなし得なかったであろう (pp.127-130参照)。

歴史を振り返ってみると、フランス革命前に王室を批判してきた新聞、皇帝ナポレオンと彼を美化する肖像画を描き続けたダヴィッド、1936年のベルリン五輪大会を利用してアーリア人の優秀さをアピールしようとしたヒトラー、1990年代前半の旧ユーゴスラビア紛争とセルビア系勢力を「悪者」にしたアメリカの広告宣伝会社、2003年に始まったイラク戦争とアメリカ軍によるイラク人捕虜虐待の生々しい写真など、歴史上の大きな改革、革命、戦争には、情報伝達技術の革新と大胆な使い方が常に存在してきた。だが、その始まりは間違いなくルターの宗教改革であった。

もし、江戸時代の日本に活字の技術が存在していたら、歴史の流れは変わっていたのだろうか。活版印刷は木版印刷より容易に原板が作れ、かつ大量に印刷できるのだから、太平の世における学問や言論がもっと活発になったのか。大塩平八郎の檄は活版印刷で印刷されたのだろうか。逆に、浮世絵はあれほど発達したのだろうか。想像するだけでも楽しくなる。

ルターは、有識者の共通語であるラテン語で書かれた聖書を、庶民のことばであるドイツ語に訳す上で、様々な工夫を重ねた。これはよく知られた事実である。だが、著者の解説を読むと、ルターが語彙の選択にとっても敏感だったことがわかる。たとえば、「重荷を負う者はだれでも私のもとに來なさい。休ませてあげよう」というマタイの福音書の一節（第11章28節）は、「だらりと休ませるのではない」ので、「元気づける」ということばを選んだと言う（p.166）。彼のドイツ語訳はバチカンから厳しく批判されたのではあるが。

日本でも、「源氏物語」を現代語に訳す、さらには女子高校生ことばに訳す試みがされてきた。翻訳の世界では、意識をしのぐ「超訳」が誕生し、映画の字幕、哲学書など、様々な分野で作者と読者をつないでいる。こうしてみると、ルターは「超訳」の草分けでもあった。

ところで、近年は「ことば」が実に軽い。しかも、呆れるばかりに迂闊で不用意な発言が多い。政治家は、希望的観測に基づき、公約を作る。公約が実現困難と判明しても、「ブレた」と言われるのを恐れるあまり、前言に固執して、政策が破綻する。政治家、有名人、一般の個人が誤解を招く内容をブログやツイッターに書き込み、謝罪と撤回に追い込まれることもある。情報源の不確かな話がまことしやかに多数のブログに記され、グーグルでキーワードを検索すると上位に現われる。インターネット上ではナショナリズムが燃え上がり、外交関係にさえ影響を及ぼしている。

日常生活では、スマートフォンのアプリケーションを使った友人・知人とのおしゃべりに没頭し、ネット依存症になる者がいる。ネット上のやりとりが喧嘩やいじめに発展し、最悪の場合には殺人に発展することさえある。

義務教育の普及で字を読み書きできるようになったのに、アプリ上の口論

から殺人につながるのは、何とも皮肉ではないか。ルターのドイツ語訳聖書が出版された頃、聖職者の語りかけによってではなく、自分の目で神のことばを聖書から直接読みたいと、人々は必死に母語を勉強した。識字率が高まった結果、あの時代も他人の悪口を書き連ねる者が増えたのだろうか。

ルターの時代は書くという行為自体が非常に高価で、紙や羊皮紙に駄文を書き連ねることはできなかった。何度も文案を頭の中で推敲し、ほぼ完成させてから、ようやく紙面にペンを走らせたのであろう。現代は、パソコンなどの端末に文章を手早く打ち込み、何度でも書き直すことができる。マウスを使えば長文のコピー&ペーストもクリック1つで行える。手を動かす必要が減る程、人間はことばの持つ意味や重みにかえて鈍感になってしまうようだ。だが、インターネットで全世界の人々が瞬時につながる時代だからこそ、ことばの重みを一層受け止める必要があると思う。なぜなら、一端サイバースペース上に発されたことばは、第三者によって瞬時に閲覧・複製され、世界中に流布するからである。

最後に、本書はルターの宗教改革を懇切丁寧に解説した秀作である。キリスト教史の入門書がほしい人、宗教改革500周年を前に世界史の復習がしたい人はもちろん、国際法、国際政治史、メディア史を考えたい人にも推選できる好著と言えよう。著者の長年にわたる研究から生まれた本書に、評者の心からの敬意を表したい。